

17	刈谷	刈谷市立衣浦小学校	カワジ マミ 名前 河治真未
分科会番号	8	分科会名	音楽教育

「自ら感じ・考え・表現する子の育成」－3年目の箏を用いた授業(6年生)の実践を通して－

1 主題設定の理由

子どもたちは、学校生活を過ごす中で成功や失敗を繰り返しながら日々成長している。些細なことをきっかけに、何かを楽しめるようになったり自分に自信がついたりして、大きな成長を見せることも珍しくない。それは子どもならではの強みではあるが、一方で、学校現場での子どもたちを見てみると、特に高学年になるにつれて、教わったか教わっていないかが自分ができるかできないかの判断基準になってしまいがちで、自らで気づき進んで考え学んでいくという点においては、その力を発揮しきれていない。子どもは幼少期から、興味をもった遊びを発展させていくなど、自分で気づき考え学んでいく力をもっている。それが学校での学習の場となるとつい受け身の体制になり、習ったことを習ったようにだけ表現する、もしくはこれは習っていないからわからない、となる姿をしばしば見る。それは私たち教師が慣習的に設定してしまう伝達的な一斉指導の授業構成や子どもたちへの言葉がけを含む評価の仕方にも要因があるのではないだろうか。音楽の学習においても、ただ楽譜にある音を再生するに留まったり、教師からの指摘や助言に従って表現したりするだけの子どもの姿を依然として生んでおり、自らの気付きや思いから考えを巡らせ表現を工夫していく姿となると、必ずしも全ての子に見られるような指導ができていない現状がある。このような問題意識から、音楽の授業での学習を通して、これまでの自分の経験から得た知識や感覚などを支えに自身の内面を働かせて感じ気づく力、それをもとにどうしたいか、どうしていくとよいかを考える力、そして考えたことをより相手に伝わるように工夫して表現する力を育てたいと考えた。これらの力が身についていくことは、音楽の場に限らず、いずれ子どもたちの様々な将来の場面において自分の思いを表現し、進む道を切り開いていくという過程で強みとなると考える。そんな子どもたちの将来の助けとなるような力を音楽教育の中で育みたいと願い、研究主題「自ら感じ・考え・表現する子の育成－3年目の箏を用いた授業(6年生)の実践を通して－」を設定し、その研究に着手した。

2 目指す子ども像と研究の仮説

(1) 目指す子ども像

- 【自ら感じる】 ① 音や音楽を聴いて様子や景色を思い浮かべたり、気持ちを想像したりして、自身の内面を働かせ音楽と関わろうとする子
- 【自ら考える】 ② 音楽を形づくっている要素を聴き取り、それらの働きが生み出すよさや面白さ、美しさを感じ取ることを支えにして、音楽的な見方・考え方を広げ、表現の工夫を考える子
- 【自ら表現する】 ③ 音との相互作用を通して、自分が感じたことや考えたことをもとに試行錯誤し、自分の思いを音楽で表すことができる子

(2) 研究の仮説

「目指す子ども像」に迫るために、次のような仮説を立てて実践を進めた。

【仮説①】

これまでの学習経験と結び付けながら学ぶことができる題材の設定や、興味関心を引き取り組みやすい楽器を用いて意欲が高まる導入の工夫をすれば、子どもたちは自ずと音や音楽を聴いて、様子や景色を思い浮かべたり、気持ちを想像したりしながら、自身の内面を働かせ音楽と関わろうとするだろう。

【仮説②】

導入での経験を土台に、新たな音楽表現について知覚・感受を促す比較聴取を設定し、音や音楽の印象を伝え合ったり、そこから思いついた情景や、それに関わる奏法や演奏の工夫などを交流したりして、子どもたちが学習内容について十分に知覚・感受できる場を充実させれば、それを基に子どもたちは自らの音楽的な見方・考え方を広げ、表現の工夫をすることができるだろう。

【仮説③】

個の気付きや考えを活用したグループでの学習活動という発展を仕組み、さらには他のグループの良

さを感じたり、自分たちの思いを伝えられた喜びを感じたりする場を設定すれば、子どもたちは音との相互作用を通して、自分が感じたことや考えたことをもとに試行錯誤し、自分の思いを音楽で表すことができるだろう。

3 研究の仮説を受けての具体的な手だて

【仮説①に対する手だて】

手だて1 学年間における題材の連続性・発展性を見通した指導計画

箏を用いた題材の授業を4年生・5年生・6年生と連続的に計画し、3年間の学習のつながりを意識して発展性をもたせるよう指導計画を考えた。4年生では、「ことでわらべうたをひこう」、5年生では「音階や音色を意識して、ことで『さくらさくら』を演奏しよう」という単元を組み、子どもたちが箏という楽器へ徐々に親しみを増しながら、その奏法を身に付け、箏の演奏で自分の思いを表現するという経験を重ねてきた。6年生では、その3年目の学習として、「ことの音色を生かして『夕やけ小やけ』を演奏しよう」という題材を設定し、2年間での学びの経験を生かしながら、さらに発展的に、自身の感じたことや考えたことをもとに、箏の演奏で思いを表現する姿を育むことを計画した。

手だて2 意欲を高める導入の学習活動「音探しタイム」、「作曲者の表現に触れる」(経験)

第1時で子どもたちが「夕やけ小やけ」の旋律を初めて弾く時は、数字が所々抜けている穴あき楽譜を使って、実際に何度も弦を弾いて確かめながら旋律に合う音を探し、数字譜の抜けているところを埋めていく「音探しタイム」を行う。クイズ感覚で音探しをしながら何度も旋律を弾くことで、指の動きを覚え自然と演奏するための技能を身に付けられることを期待する。また、第2次の音楽づくりの1時間目では、それまで斉唱する時になんとなく聴いていたピアノの前奏に注目させ、冒頭の印象的な低音1音がどんなことを表しているだろうかと問いかける。子どもたちが、たった1音で情景を表している作曲者の意図とそのおもしろさを感じることで、前奏づくりへの足掛かりとさせたい。

【仮説②に対する手だて】

手だて3 子どもの思考の流れに沿い、音楽的な見方・考え方を広げる比較聴取の設定(分析)

題材の流れにおいては、子どもの思考に沿って無理なく、且つ子どもの主体的・協同的な学習活動を導くことができるように、経験→分析→再経験→評価というサイクルで単元を構成する。その中で、「経験」を振り返って音楽的な意味を見出す「分析」の場面では、子どもの思考の流れに沿いながら、指導内容について十分に知覚・感受できる比較聴取を設定する。第1次では、子どもたちが前時に経験している「夕やけ小やけ」三重奏と、新しい奏法のある装飾音パートを入れた四重奏を、第2次では、「合奏の前に入れる情景を表す音」として各グループが即興的に考えてみた音楽のうち、似たような情景を表している2つのグループを抽出して聴き比べさせる。

【仮説③に対する手だて】

手だて4 個の学びを発展させるグループでの表現・音楽づくりの活動(再経験)

経験の場面で行っていたグループでの音楽表現を、再経験の場では、分析の場面で得た音楽的な見方・考え方を働かせながら、より自分の思いを表現できるように、子どもたちの主体的・対話的な学びを実現したい。第1次では、新たな奏法による音色を生かして、グループで表したい情景に合うように、飾りの音パートを中心にグループの四重奏を工夫させたい。第2次では、音楽づくりとして、四重奏につける前奏を考えさせ、グループの表したい情景がより伝わる音楽表現を生み出せるようにする。グループで協働して表現活動や創作活動に取り組める場の設定をすることで、子どもたちの主体的・対話的な学習活動を導き、個の学びを発展させる再経験の場を充実させたいと考えた。

手だて5 相互交流で他のグループの工夫とその良さを感じたり、自分たちの思いが伝わる喜びを感じたりできる発表会の設定(評価)

評価の場面では、グループでの音楽表現を相互交流できる発表会を設定する。子どもたちにグループ活動の目標をもたせ、自分たちが工夫し作り上げた音楽表現で思いが伝わる喜びを感じられるようにしたい。また、他のグループの表現の工夫から、その良さやおもしろさを感じ取り、感想を伝えあったり、自分たちの表現へ生かそうとしたりする姿を期待する。第1次では学級内でのミニ発表会、第2次では、4年生を迎えるためのスペシャル発表会を計画する。自分たちの思いや意図を自分たちで工夫した音楽表現で伝え、それが聞き手に伝わり認められる喜びを感じる経験を重ねることが、これからの自ら表現しようとする子どもを育むことにつながると考えた。

4 抽出児童Aのとらえと願う姿

児童Aは、友達や教師の話をよく聴き、歌ったり演奏したりすることに対しても真面目に取り組むことができる。一方で、自分の考えや表現に対して自信がなく、何か思ったことがあっても発言に躊躇したり、歌や演奏では小さな声や音で、楽譜にあることをただ再生するに留まったりと、思いをのびのび

と表現できずにいる姿を多く見る。これまでの音楽の授業で、音や音楽を聴いて、その特徴やそれが表す情感を感じ取ってワークシートに書いたり、友達の意見を聴きながら、表現の工夫を考えようとしたりする姿が徐々に見られるようになってきた。しかしそれを全体やグループ活動の場で積極的に意見を交わし合ったり、自分の思いを音楽表現へ生かし自信をもって発表したりするまでには至っていない。本単元では、児童Aが音楽学習に意欲的に取り組む中で、自らの内面を働かせて考えたり、思いを表現したりすることの面白さを感じてほしい。自らの音楽的思考を働かせて、仲間と進んで関わりながら主体的に活動し、試行錯誤しながらも自分の思いを十分に音楽や言葉で表現する児童Aの姿を期待したい。

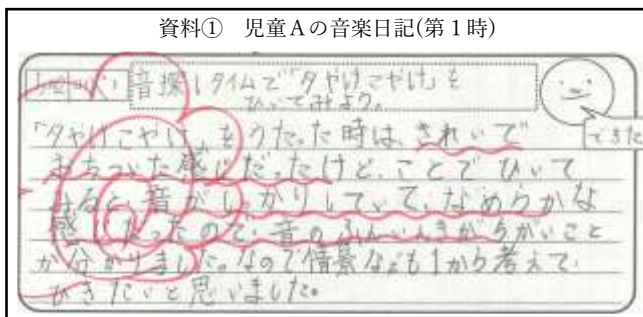
5 実践と考察

(1) 4・5年生での箏を用いた学習を想起して、意欲的に演奏に取り組む子どもたち(手だて①②)

第1時間目で箏が準備された教室に入ると、子どもたちは「懐かしい」と言いながら、すぐに箏を運んだり爪を選んだり準備を始めた。「箏の頭の下に枕をおいて」、「爪は親指の付け根くらいだよ」などと友達同士で会話をしながら意気揚々と準備をする姿が広がった。そして、教師が箏の各部の名前クイズを行うと、「竜角」「弦」「箏柱」など次々と答え、忘れていた子も「ああ、そうだった」と笑顔で思い出しながら箏に触れる様子が見られた。次に音を出す時には、合言葉「ぐう、ぴん、きゅっ」に合わせて、弾く姿勢を確認し、4年生の学習で箏の基本的な弾き方として名付けた「しっかり弾き(弦に対して爪を斜めに当て、手前から向こうへ押すようにして弾く)」を思い起こしながら音を鳴らしてみると、箏の美しく迫力のある音が響き渡った。1時間目から、箏の授業の準備を円滑に行い、芯のある良い音色を出せる子どもたちに、昨年までの学習経験の実りを感じた。そして、「今年は何なことをするの」と次の学習へ興味が高まっている子どもたちに、「夕やけ小やけ」の歌詞を提示した。この曲は2年生で必修の共通教材なので、曲を覚えていない子どもも多かったが、範唱を聴いてすぐに歌えるようになり柔らかい歌声が教室に広がった。「どんな情景が思い浮かぶかな。」と問いかけると、「日が暮れるころにオレンジ色の空の下、手をつないで子どもが帰る様子。」「2番は夜で、月が顔を出す秘密の時間。子どもが帰った後の静かな公園にきれいな星が出ている。」などの意見が上がった。今回、箏を用いた授業で「夕やけ小やけ」を教材に選んだのは、歌詞や曲想から思い浮かべた情景をもとに、「箏の音色でこんなふうに表示したい」と思いや意図をもちやすいのではないかと考えたからである。斉唱からさっそく曲のイメージを膨らます子どもたちの様子に、これからの学習への期待が高まった。

続いて「夕やけ小やけ」の旋律を箏で弾くために、「音探しタイム」を行った。穴あき楽譜を見た子どもたちは、4・5年生でも経験していたため、「あ、またこれだ。探して弾くやつだね。」と言い、さっそく歌を口ずさみながら弦を弾き始めた。児童Aも、自分の弾く箏の音を注意深く聞きながら、合う音を見つけると嬉しそうに楽譜に書き込んでいた。「音探しタイム」の間、集中して何度も弾きながら旋律に合う音を探し、少しずつつなげて演奏していくことによって指の動きを覚え、だんだんと「夕やけ小やけ」の旋律を弾くことができるようになっていった。「音探しタイム」を終え、子ども達の発言で旋律譜の答え合わせをした後、児童Aは自分でやりきれなかった部分の音を書き込み、再び何度も練習していた。徐々に弾けるようになってきた児童Aは、本時の音楽日記に、「夕やけ小やけを歌ったときは、きれいで落ち着いた感じだったけど、箏で弾いてみると音がしっかりしていてなめらかな感じだったので、雰囲気違った。なので情景なども1から考えて弾きたいと思いました。」(資料①)と振り返った。ただ旋律を弾けるようになるということだけでなく、斉唱の時に感じた曲のイメージと比べながら、箏の音色での「夕やけ小やけ」に魅力を感じ、これから表したい情景を考えて演奏を工夫したいという意欲が読み取れる。4・5・6年と連続的に設定した箏を用いた単元の設定と、遊び要素のある「音探しタイム」という導入によって、児童Aの高い意欲と集中力を引き出し、次時に向けた活動への思いをもたせることができたと感じた。

資料① 児童Aの音楽日記(第1時)

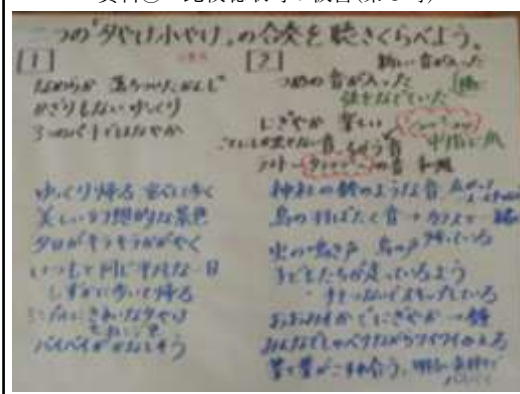


(2) 比較聴取にて、活発で豊かな意見交流から、新たな奏法による音色について十分に知覚・感受する子どもたち(手だて③)

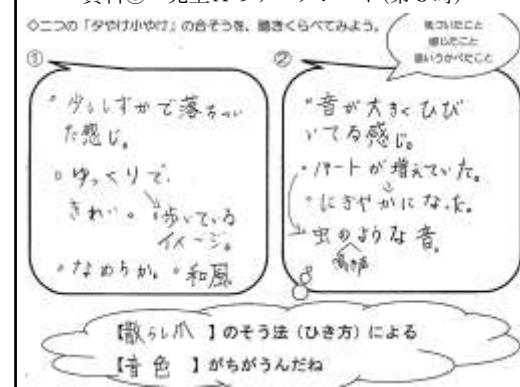
2時間目に、旋律パートに加えて、カラリン(流し爪)パート、伴奏パートを入れグループで三重奏に取り組んだ。そして3時間目には、その三重奏と、教師が4つ目のパートとして装飾音パートで入った四重奏の比較聴取を行った。装飾音パートには、これまで親指にしか爪をつけてこなかったが、中指にも爪をつけ、弦をこするようにして音を出す「散らし爪」や、一と二の糸を引っ搔くようにして鳴らす「かき爪」、これまでやってきた流し爪(カラリン)と反対方向に連続して鳴らす上行形のグリッサンド

「引き連(シャーンリン)」という新たな奏法を取り入れた。「かき爪」や「引き連」は新たな奏法といえども、5年生で「さくらさくら」に、自分で考えて飾りの音を入れる創作の学習で、似たような奏法を使っている子もいたため、今回は特に「散らし爪」の奏法が子ども達にとって一番新鮮に新しい音色として心を動かすだろうと予想した。実際に四重奏を聴かせると、散らし爪の「シュッシュュッ」という音がした瞬間、子どもたちは目を見張り、教師がどのようにして鳴らしているのだろうと興味津々に覗き込む様子が見られた。そして、聴き比べた後の意見交流では、「散らし爪」の音色を中心に、三重奏と四重奏のイメージの違いや、そこから思い浮かぶ情景が、子ども達から次々と多様な言葉で表現された。(資料②)児童Aは、①(三重奏)では、「少し静かで落ち着いた感じ。ゆっくりできれいな景色の中を歩いている。」、②(四重奏)では、「パートが増えてにぎやかになった。虫の鳴き声のような音が、大きく響いている感じ。」とワークシートに書いており(資料③)、全体交流の場で挙手し発言した。その発言を聴いて周りの子たちが、「ああ、なるほど。」と声に出したり、「私は鳥の羽ばたく音に聞こえて、カラスと一緒に帰っている感じが思い浮かんだ。」や、「ぼくは、子ども達が走って帰る砂の音に感じて、楽しく帰る感じを思い浮かべた。」と発言をつなげたりすると、児童Aはうんうんと首を縦に振りながら、様々な感じ方とその音色の特徴を結び付けて受け取っている様子であった。児童Aを含め多くの子ども達が、奏法による音色について深く知覚・感受し、それが生かされた四重奏に魅力を感じている様子であった。子どもたちの知覚・感受の交流が十分になされたところで、教師は各奏法の名称(散らし爪など)と、その違いがそれぞれの奏法による「音色」という音楽的要素によって生まれていることを用語と共におさえ、子ども達の新たな音楽的な見方・考え方の習得を確認した。

資料② 比較聴取時の板書(第3時)



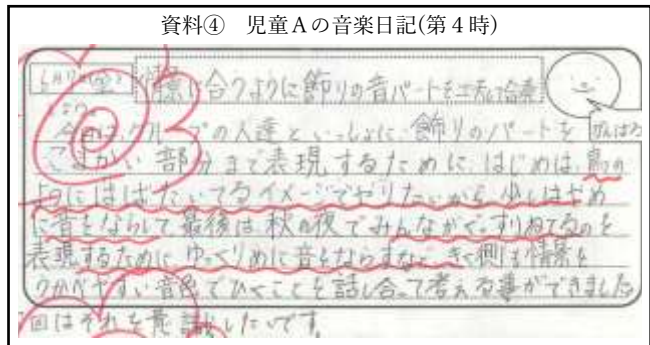
資料③ 児童Aのワークシート(第3時)



(3) 個の学びを基に、仲間と話し合いながら試行錯誤し、グループの表現を工夫する子どもたち(手だて④)

その後、子ども達はグループ活動へ戻ると、まずは各々が新しい奏法に挑戦してみる姿が広がった。比較聴取にて出会った音色に魅力を感じ、自分でも演奏してみたいという思いが膨らんでいた故である。「散らし爪は、爪を縦にして糸を速くこすると、シュッと勢いのある音がするよ」、「引き連で、最後の音を、”為”で止めるのが難しいな」など、やってみて気付いたことを仲間と話しながらコツをつかんでいく様子が見られた。そして、飾りのパートの音色を意識して、グループで表したい情景に合うように「夕やけ小やけ」を工夫して演奏しよう」という課題の下、グループの四重奏でどんな情景を表したいか、そのためにどんな表現の仕方をしようかと考える活動に移っていった。児童Aを含む1グループは、4人がそれぞれ四重奏を聴いて思い浮かんだ様子を交流しながら、「子どもたちが、夕方の温かい感じの中、にぎやかに明るくしゃべりながら帰っている様子」を表そうと話し合った。そしてその情景に合うように、表現の工夫を考えていく活動につなげたいところであったが、始めはそれぞれ個々で演奏の練習をしてしまい、なかなかグループで話し合えずにいた。すると、児童Bが児童Aに「かき爪はこうだよ」と聞き、弾き方を確かめながら一緒に練習する中で、「子どもたちがみんな帰っている感じだから、ジャンジャン(かき爪)は、軽めの音で明るい感じにしない。」と提案した。それに児童A含めグループの仲間が賛同することをきっかけに、「シュッシュュッ(散らし爪)は、鳥の羽ばたく音かな。」「からすと一緒に帰ろうとしゃべって羽ばたく感じにしよう。」などと、飾りの音パートの音色から、より細かな表したい情景が膨らんできた。児童Aも「じゃあ、最後のシャーンリン(弾き連)は、帰った後の感じで、ゆっくりにしていくのはどうだろう。」と話す中、児童B「いいね。どれくらい。」と鳴らし方を試行錯誤する姿があった。そうして工夫のアイデアが出てきたところに、「じゃあ、合わせてやってみよう」と四重奏に挑戦する際には、児童Aは自ら飾りの音パートの担当を志願し、グループで考えた演奏の工夫を、思いをもって丁寧に表現していた。児童Aの音楽日記にも、「今日は、グループの人達と一緒に、飾りのパートを細かい部分まで表現するために、はじめは鳥のように羽ばたいているイメージでやりたいから少しはやめに音をならして(散らし爪)、最後は秋の夜でみんながぐっすり寝てるのを表現するために、

ゆっくりめに音を鳴らす(弾き連)など、聴く側も情景を浮かべやすい音色でひくことを話し合っていることができました。」とあり(資料④)、グループの仲間と互いの考えを受け入れ合いながら、表したい情景に合うような工夫を考えられたことに満足しているのが読み取れる。これまで控えめで積極的に表現する姿が少なかった児童Aが、だんだんと自分の思いを表現するおもしろさや、その価値を感じ始めていると捉える。第5時間目のミニ発表会(手だて⑤)では、「子どもがしゃべりながらゆっくり帰っているから、全体のテンポをゆっくりにしたい。」「散らし爪は鳥が羽ばたいているのを意識して、勢いをつけるけど長めにひいてシュッの音がよく聞こえるように」というように、さらに演奏への思いを深め、工夫を重ねて発表した。児童Aが、仲間との関わりを通して音楽表現を試行錯誤する中で、自らの内面を働かせて考えたり思いを表現したりする活動を主体的に行えた結果、思いを音楽や言葉でのびのびと表現できるようになってきたと感じた。



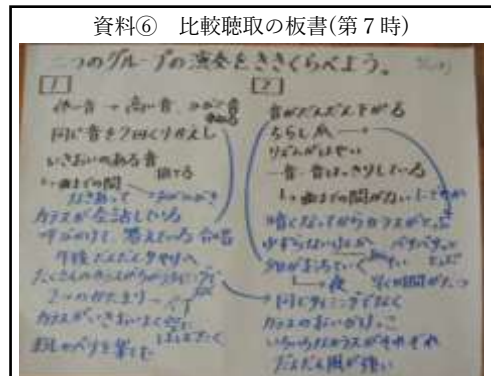
(4) 前奏づくりという発展した学習へ、さらに意欲を高める子どもたち(手だて②)

第6時間目では、第1次単元のまとめとして、ミニ発表会でグループの四重奏を発表した子どもたちに、「みんなは今、どうやって演奏を弾き始めていますか。」と問いかけると、子ども達は、「いっせーの一でと言って始めている。」と口々に返した。そこで、「授業で最初に歌う時に先生が弾くピアノは、どんな音で始まっていたかな。」と聞くと、首をかしげる子や、あっと何かを思い出して「だーんっていう音」という子などの反応があった。そこで教師が改めてピアノ伴奏の冒頭の低いオクターブの一音を鳴らし、「この作曲者が最初に入れたこの音。何を表現していると思いますか。」と問いかけた。(資料⑤)すると子ども達から、「日が暮れるから暗くなるイメージの音」、「帰る時間を知らせる音」などの意見に続き、「鐘の音」という正解も出た。作曲者がこの一音で鐘の音という情景を表していることを伝え、私たちの四重奏にも『演奏が始まる前の情景の表す音』を加えようと提案した。ここでは、あえて前奏づくりとせず、ただ1音で情景を表すことができる例をヒントに、難しい音楽づくりでなく気軽に取り組み始められるよう配慮した。子どもたちは、自分たちで作るということに多少驚きながらも、前時までに考えたグループで表したい情景を振り返りながら、どんな音を演奏前に加えようか、さっそく仲間と話し合う姿が広がった。「夕やけ小やけ」の特徴的な前奏を生かした導入により、次の単元の〔経験〕の活動へ、より意欲を高めることができた。



(5) 比較聴取にて、二つのグループの演奏を特徴づける音色や構成を知覚・感受し、グループの音楽づくりへつながる音楽的見方・考え方を広げる子どもたち(手だて③)

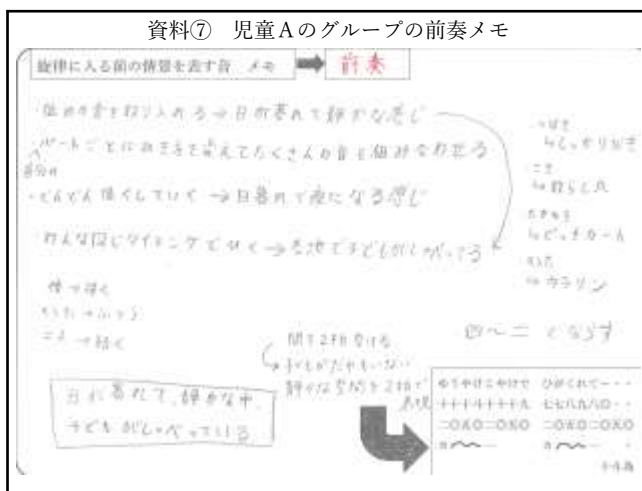
第7時では、前時即興的につくった『演奏が始まる前の情景の表す音』のうち、似た情景を表している2つのグループを抽出し、比較聴取を行った。今回抽出したグループが考えた音楽はどちらも「カラスの鳴き声」を表しており、その様子を表そうと即興的に作り演奏している音楽が、自然とこれまで経験を生かし様々な奏法を取り入れて、音色や音楽の構成の特徴をもっていた。それを聴き比べると、子ども達からは2つのグループの音楽に対する「すごい。」という感嘆の声と共に、いろいろな知覚・感受が言葉豊かに交流された。(資料⑥)その中で児童Aは、①グループを「呼びかけと答え」がはじめにあった。たくさんのカラスが違うタイミングで鳴いている。」、②グループを「2つの奏法があったけど、同じ音を鳴らしていた。たくさんのカラスが同じタイミングで鳴いている。」と書いていた。「①のグループは高い音と低い音を交互に鳴らして呼びかけと答えになっていた。」「それが、カラスが呼びかけて答えているように会話している感じがした。」という発言があると、自分のワークシートを見比べならうんうんと頷き、続いて自身も発言することができた。児童Aが全体場で自分の気づきを発信し、仲間との意見の交流による学習の深まりに対して主体的になっている姿である。その後も、「カラスの鳴き声」を表した音楽に対する様々な気づきや感じ方が交流される中、児童Cが、「②グループは、情景を表す音楽が終わってから曲に入るまでに間がなかったから、にぎやかな感じがした。」、さらに続いた児童D



が「Cさんに付けたしで、①グループはカラスで会話していた後、曲までに間があったから、その会話が響いた時間がある感じがした。」と発言した。子どもたちが、『合奏の前の情景を表す音』から旋律の始まりまでの「間」、つまり音のない瞬間も音楽の特徴と捉え、そこからイメージをもつことに驚いた。そしてこの発言が、この後のグループ活動で子どもたちにとって工夫できる音楽の一つの要素として広がっていった。子ども達は教師の想定以上に音楽を感じる力があり、その相互作用が新しい学びを生んでいくと実感した事象である。知覚・感受の交流が十分になされたところで、教師が2つのグループの演奏を特徴づけている音楽要素について、「音色」、「呼びかけと答え」「音の重なり」「間」と用語と共に結びつけておさえ、そしてこのように作っている主旋律の前に入れる情景を表す音を、「前奏」ということを伝えた。子どもたちは、比較聴取にてじっくりとそれらについて知覚・感受し、自身の音楽的見方・考え方を広げ、より工夫して情景を表す自分たちの前奏にしようという思いを高めることができた。

(6) 発表会にて、自分たちの工夫した音楽で思いを伝えられた満足感を得たり、仲間の表現から更なる多様な表現を感じたりする子どもたち(手だて⑤)

グループ活動を再開した児童Aは、児童Bに「どうする？ 私たちも呼びかけと答えとかいれる？」と言われると、「ううん、真似してもつまらない。今の音が私たちのグループの情景に合った音だからここはこれで良い。」と答え、自分のこれまでの表現を大切に思っていることが伺えた。児童A等は、前奏で「日が暮れていく中、子ども達がしゃべりながら帰り始める」ことを表そうと、4人がそれぞれ別の奏法(しっかり弾き、散らし爪、ピッチカート、流し爪)で、「五・四・三・二」と音を下降させて同時に鳴らしていた。低い音を下降させるのは、日が暮れていく様子、様々な奏法による音色はいろいろな子のおしゃべりを表して多様な音を重ねた。そしてさらに、前奏から旋律が始まるまでの「間」という音楽要素を学んだことを取り入れて、「子どもが誰もいなくなった静かな空間を表現するために、前奏の後に間を2拍あける」としたり、「遠いところからも近いところからも子どもが集まってくるから、強く弾く人と弱く弾く人を分けよう。」と強弱をつけたりと、表現の工夫を重ねていった。(資料⑦)そうして作った前奏とこれまでの四重奏をつなげ、グループの「夕やけ小やけ」を作り上げていった。そして、単元のまとめとして、箏を学習し始めたばかりの4年生を招いてスペシャル発表会を行った。子どもたちは緊張しながらも、これまでの学習で得た箏を演奏する技能や、自分たちで工夫した「夕やけ小やけ」の演奏に自信をもっており、工夫した点や聴いてほしい見どころを説明した後、堂々と発表した。児童Aも、前奏で担当する散らし爪をしっかりと準備して堂々と弾き始めた後、グループの仲間とアイコンタクトをしながら2拍分の間を感じ合い、旋律に入ってから飾りの音を一つ一つ思いをもって丁寧に弾く姿を見せた。そして、「前奏ではいろいろな音が重なってにぎやかな後、シーンとする『間』が人がいなくなった感じがした。」「ゆっくり落ち着いた演奏が、みんなでゆっくり帰っている様子でした。」と感想をもらおうと嬉しそうな表情を見せた。思いを音楽で表現する楽しさや面白さを感じながら自信をもって演奏し、それが伝わる喜びを感じている姿を見ることができた。



6 研究のまとめと今後の課題

今回、4・5年生と積み重ねてきた箏を用いた授業において、児童Aを含め多くの子ども達の「自ら感じ・考え・表現する」姿を感じることができた。子どもたちがこれまでの自身の経験に働きかけながら音楽を感じ取ろうとできる題材の設定や導入の工夫、新しい音楽的見方・考え方を子どもたちの気付きで広げられる比較聴取の設定、そして思いを表現することの面白さや喜びを感じられる環境の充実を図ることは、子ども達の高い意欲を継続させ、自ら学んでいこうとする姿を導くことができると感じた。そしてそれは、1授業1単元の学習だけではなく、学年間の積み重ねを見通して長い期間で育てていくことが大切であると考え。これからも、子ども達の本来もっている感じる力を引き出し、自ら考え表現できるおもしろさや喜びを共に感じられるよう、自身も試行錯誤しながら実践を重ねたい。